

「モノと情報」班 B

天理参考館収蔵のラオス標本と天理教ラオス伝道について
— 1965年～1978年にラオスと関わった邦人宗教家達の足跡—
吉田裕彦（天理大学附属天理参考館）

キーワード：ラオス標本、ラオス伝道、自動車修理工場
サトウキビ栽培、巡回医療活動、教育支援
調査場所：天理大学附属天理参考館、天理教名古屋大教会信者詰所

Laos Collection in Tenri Univ. Sankokan Museum and Laos Mission of Tenrikyo

Hirohiko YOSHIDA (Sankokan Museum)

Keywords: Laos Collection, Laos Mission, Car Garage,
Sugarcane Cultivation, Medical Mission, Training Program

1. はじめに

昨年(2003年)夏、「モノと情報」班より担当者の勤務先である「天理大学附属天理参考館」¹(以下、天理参考館、当館などと略称)に今回の研究プロジェクトへの協力要請が寄せられた。確か、日本国内の博物館がメコン川流域地域で収集した標本情報を、それぞれの館が独自に管理するだけではなく、総合地球環境学研究所(以下、地球研と略称)を含めた各館がその情報を共有することにより、メコン川流域の文化について新たな視点を見いだしていくことが可能となり、その一翼を天理参考館で担当して頂きたいという内容だったと記憶している。

2003年3月末時点で、天理参考館が収蔵する東南アジア標本は3,441点。決して多いとはいえない点数である。さらにメコン川流域と地域を限定していくとその数はさらに少なくなる。地球研「モノと情報」班の天理参考館に対する期待は、1930年創設という当館の沿革を鑑み、比較的収集年代が古い標本の活用であった。

検討の結果、当面はラオス標本に焦点を絞ることとし、ラオスに政変が起き、1975年から1989年にかけて鎖国状態となる以前に収集した標本もしくは1975年以前に使用されていたとみなされる標本情報を整理することから始めようということとなった。

2. 天理参考館収蔵のラオス標本

メコン川流域3カ国(ラオス、タイ、カンボジア)から収集された天理参考館の標本は、担当する学芸員が調査に出向いて集めたという例は少なく、国内研究者や天理教関係者の他、現地で収集活動を行ったコレクター達から一括して寄せられた標本が主となっている。1975年以前に使用されていたとみなされる標本を抽出するにあたり、それぞれの標本の収集経緯を考慮していくと、収集者の手元にある程度の期間、保管された後に天理参考館に寄せられた標本も相当数見受けられる。このような事情を考慮した上で、1986年までの収集標本を調査対象とすることとした。

天理参考館の標本管理は基本的に標本(資料)カードと台帳によってなされている。標本(資料)カードは地域(東南アジア、南アジアなど大地域分類)ごとに分類整理され、台帳は登録順に標本情報が書き込まれている。天理参考館では現在、標本情報のデジタル化作業が進行中で、中国や台湾、アフリカなど約半数の標本がデジタル・データ化されてきている。しかし、今回のプロジェクトで対象とするメコン川流域3国を含む東南アジア大陸部の標本情報については、デジタル化作業に着手されていなかった。

「モノと情報」班では作業効率を高めるために、まず、1986年までに収集された東南アジア大陸部の標本リストを作成するところから着手した。その結果、東南アジア大陸部の標本は全部で768点あり、うち、メコン川流域3国からはラオス標本35点、タイ標本576点、カンボジア標本49点がそれぞれ収蔵されていることが判

明した。

ラオス標本 35 点の詳細については次年度の報告に譲るが、標本収集に携わった人々とその時期を列挙すると以下ようになる。

当時、大阪市立大学教授であった岩田慶治氏から 1958 年に寄せられた 2 点が、天理参考館が初めて収集したラオス標本であった。1963 年石井健一氏収集の 1 点は第三次大阪

1958年	岩田慶治	2点
1963年	石井健一	1点
1965年	森井敏晴	8点
1968年	森井敏晴	4点
1969年	森井敏晴	1点
	佐藤善昭	1点
1971年	丸川仁夫	11点
	宮城忠	4点
1975年	森井敏晴	1点
1978年	森井敏晴	2点
計		35点

市立大学（カンボジア）調査団から寄せられたカンボジア標本に混入していた。そして、1965 年から 1978 年にかけて、5 度にわたり計 16 点の標本を寄贈した森井敏晴氏は、当時天理教名古屋大教会長の職にあって、天理教のラオス伝道に若き情熱を燃やした宗教家であった。1969 年にラオス標本を 1 点寄贈している佐藤善昭氏もこのラオス伝道の関係者である。また、1971 年に 11 点のラオス標本を寄せている丸川仁夫氏は森井氏の学生時代の指導教官であり、当時天理大学教授兼天理参考館民俗部長であった。丸川氏収集の標本は森井氏のラオスでの伝道活動を視察した際に収集したものである。宮城忠氏は当時、東京在住のコレクターで 1971 年にラオス標本 4 点を当館に寄せている。

天理参考館収蔵ラオス標本の年代別収集者

天理参考館収蔵ラオス標本の年代別収集者

数少ないラオス標本であるが、その中で特に際だった存在感を見せているのが、森井コレクションである。1975 年に生じたラオス政変以前のラオス情報を国内博物館に収蔵する標本を通して読みとろうとした「モノと情報」班は天理参考館に寄せられたラオス標本から、1965 年から 13 年間に亘って天理教がラオスで展開していた伝道活動の存在に出くわしたのであった。

以下に天理教が展開したラオスでの伝道活動の概要を紹介し、今後の研究の課題を展望してみたい。小稿は、森井敏晴氏および、ラオス伝道にかかわった名古屋大教会関係者との面談で知りえた情報や提供していただいた資料（史料）をもとに構成している。

3. 天理教のラオス伝道

上に記したように、森井氏が天理参考館にラオス標本を寄贈した経緯は、自身のラオスでの伝道活動が発端となっていた。

森井氏がラオスで天理教の伝道活動を志したきっかけは、天理教名古屋大教会が経営していた「なごや幼稚園」の園医でもあった小川蔵太医師から天理教団による救援活動を求められたことから始まる。

小川医師は軍医として第二次世界大戦中ラオス戦線に従軍し、後、再度ラオスに赴き首都ビエンチャンで唯一の日本人医師として診療所を開設していた。が、困窮する現地の人々の状況に耐えかねて、天理教団による救済活動を仰いできたのだった。

1950 年代から 1960 年代にかけて、天理教団では広く海外へ雄飛すべき時局であることが打ち出され、教団をあげて海外伝道に取り組む姿勢が示されていた時期でもあった。当時の天理教代表者であった中山正善二代真柱による陣頭指揮の下、その氣勢は教内全体にいきわたっていたといっよいであろう。

そのような空気の下、森井会長は小川医師の救済要請を受けたのを機に、ラオスを名古屋大教会の海外での布教拠点とする決意を固めていったのであった。森井会長自身が現情視察という名目で、初めてラオスを訪れたのは 1968 年 3 月であった。この時、森井氏は現地での協力者と意見を交換し、今後の伝道活動の方策を検討して帰国している。そして 1970 年 9 月には、かねてより申請していた天理教の「布教認可」がラオス王国宗務省から下り、ラオスでの伝道活動に着手する道順が敷かれたのだった。

森井会長は、ラオスに赴いていきなり伝道活動を展開できると思うのは間違いで、いろいろな活動を通して結果的に伝道につながってくれば良しとするという考え方から、ラオス社会と関わっていった。その過程では、

ラオスの社会事情を学びながら、ラオスで必要とされる活動事業を探りつつ、さらに事業資金を捻出することまで考えていかなければならなかった。

1) 自動車修理工場 SILJA の設立

名古屋大教会からの資金持ち出しにも限界があるため、そこで考え出されたのが、自動車修理工場を核とする合弁会社 SILJA（ラオス日本産業株式会社 SOCIETE ANONYME DE DEVELOPPEMENT INDUSTRIEL LAO JAPONAIE）の設立であった。当時、名古屋市でガソリンスタンドや自動車工場などを手広く経営している「山本油店」社長の山本氏の母、山本さい氏による積極的な協力が、1970年12月に設立された SILJA の運営に大きな役割を果たすこととなった。2億円もの多額の資金を出資した山本油店は、ラオスでの布教経費を賄っただけではない。ラオス人青年を日本に招聘し、自動車修理技術を習得させる窓口であり、さらにラオスに帰国した彼らに就職機会を与える場として、SILJA がその受け入れ母体になるなど多大な貢献を果たしていた。また、当時のビエンチャンには、満足のいく自動車整備工場がないにもかかわらず、国内の輸送移動の手段は自動車しかなかったため、自動車修理の需要は大きかった。

2) サトウキビ栽培

ビエンチャンでの自動車修理工場 SILJA の運営が軌道に乗ってきた1974年、SILJA 内に農業開発部が設けられた。当時、ラオス国内で消費されていた精製白糖は、その全量を隣国のタイ等からの輸入に頼っていた。白糖の全量を国内自給で賄えるようにしたいとのラオス政府の意向、協力要請を受けて、SILJA では製糖工場設立を目標としたサトウキビ（甘藷）の育種栽培に着手していく。

当時のラオスは農業国とはいえ、素朴な一次産業の域を出ず、サトウキビ栽培に適した自然に恵まれながら、白糖製造に向けた本格的なサトウキビ栽培はなされていなかった。もっとも、ラオスには在来種で糖度の低い細茎種のサトウキビが見られ、それを用いた黒糖製造は行われていた。

SILJA では、在来種サトウキビおよび、沖縄県農業試験場の全面的な協力を受けて入手した11種類のサトウキビ種苗のテスト栽培を始めた。サトウキビ栽培のパイロットファームも、SILJA の庭から、ポントン農場およびバンホーン農場の開墾とそこでの本格的栽培へ、さらにバンマックナオ農場へと試験農場を広げていった。三年間をかけたテスト栽培の結果、糖度計のブリックスが25°を示したNCO系サトウキビが、ラオスの風土に最も適した製糖用のサトウキビだと判明した。SILJA の手がけたサトウキビ栽培は、森井氏の手足となって活躍した菅原親一氏や金森真一氏の存在が大きい。また、菅原氏はサトウキビ栽培の経過を詳細に記録した「菅原日記」を残している（資料-1, 2を参照）。

SILJA が作成した三年間の実験データと製糖計画に基づき、ラオス政府は1977年に日本政府に対して製糖工場建設の援助を要請している。この要請を受けた日本政府は、外務省と農林省共同による現地調査を実施し、その結果、製糖計画への日本の援助が確定した。森井氏をはじめ、ラオス伝道に携わった名古屋大教会の関係者の、この時の喜びは大きなものであった。だが、この時期のラオスは、ベトナム戦争のあおりを食ったの内戦状態から、1975年の共産主義政権誕生へ、さらに内戦終結後に樹立された臨時連合政府が革命政府へと変わる、まさに激動の時代にあった。共産主義政権樹立後も、SILJA の実働部隊はビエンチャンのラオス布教所に残り、配給制度や強制労働への参加などで苦勞をしつつも、事業活動を続けていたが、突然の政策変更によって、1978年の3月1日に布教所所員の全員引き上げを通告される。こうして、砂糖製造計画はその開花を前に泡沫と期してしまった。

3) 巡回医療活動

森井氏がラオス伝道に携わった二年後、1970年1月から3カ年にわたり、天理よろづ相談所病院海外医療科の山本利雄医師を隊長とする部員5名が、ビエンチャンから70kmの地点に位置するバンクーンで医療活動を展開した。それは、天理教の教えに基づき、世界中の人間が自分たちと同じ兄弟との認識から医療の手の届かない人々を救いたいとの人道的な立場に立ってなされた医療活動であった。このラオス巡回医療隊は、現地の医療の手助けをする形で最新機器、薬品を携えて、難民キャンプを巡回した。上述の森井会長は、ラオス巡回医療隊派

遣を橋渡しした中心人物でもある。

ラオス巡回医療隊の活動は、1976年11月に約2週間の期間で送られた第8次隊まで続いた。巡回医療隊の活動とは別に、初代隊長の山本利雄医師は1974年10月に3週間ラオスに赴き、日本政府の今後の医療援助についての視察を行っている。また、巡回医療隊派遣の後半に隊長として陣頭指揮に立った天野博之医師もまた、1974年11月～1975年3月まで、タゴン医療センター²に滞在し技術協力を携わっている。革命後のラオスが諸外国に再び門戸を開いた1980年代後半以降も、天野博之医師はJICA専門家（ラオス国保健省保健医療協力計画アドバイザー）となるなど、ラオスとの関わりを保ち続けてきた。

天理教が1970年代に開始したラオスでの巡回医療活動の意義については、ラオスもしくは東南アジアにおける国際医療援助の歴史や今日までの展開とあわせて、むしろ「人類生態」班のかたがたにお教えいただければと考えている。

4] 天理教の伝道活動と教育援助

森井氏を代表とする天理教名古屋大教会がラオスで伝道活動を展開するに当たっての方策の核として、先に述べた合弁会社SILJAの設立とその運営があったわけである。そして、SILJA設立と同時に着手したのが、ラオス人青年男女に対する教育援助だった。同時にそれが天理教伝道の主たる柱となっていった。

1968年、森井氏による最初のラオス訪問の翌年（1969年）には、ラオスからラオス人女子5名、タイ国籍の男子1名を招聘し、天理大学選科日本語科で日本語を習得させ、その後、女子5名は天理よろづ相談所病院で看護婦見習いとして研修させ、1名の男子は山本油店で自動車修理技術を習得させている。と同時に滞日中に天理教の教理も学ばせている。天理教の場合、天理教布教師としての資格は、本部が置かれている天理でしか受けることができないからである³。

以来、1972年までの間にラオスからの留学生は13名を数えている。後日、ラオスに赴いた巡回医療団の活動に看護助手として惜しめない協力を果たしたラオス人女性や、ラオス布教所長および布教所を支える要員、政変後には、フランスやアメリカ、オーストラリアに避難したラオス人コロニーで信仰を続けた人々も、これらの受け入れ留学生の中から輩出した。そして、その信仰は次の世代にも受け継がれており、1996年時点でのラオス人よふぼく（信者）は145名に上っている。

4. 本研究の展望と課題

天理参考館にラオス標本を寄せたコレクターの来歴を辿る作業段階で、ラオス政変直前に展開していた天理教のラオス伝道の存在に出くわすこととなった。小稿では、天理参考館のラオス標本を中心とした東南アジア大陸部標本整理の進捗状況を報告すると共に、天理教名古屋大教会が行ったラオスでの伝道活動の概要紹介を試みた。

最後に、本研究を進めるに当たり、当面の展望と課題を簡単に検討し、小稿のまとめにかえることとする。

まず、天理参考館収蔵のラオス標本を含む東南アジア大陸部標本情報のデジタル・データを作成することを主眼にした標本写真の取り込みを行い、デジタル・アーカイブズの構築を目指す。今年度で作成した収蔵標本の基礎的データをもとにした一点ずつの写真撮影を予定している。そして、各標本を地域別や機能別に分類整理する作業と共に、標本写真を添付してデジタル・データを仕上げることであればと考えている。

そして、ラオス政変直前まで展開されていた天理教ラオス伝道の実態に焦点を当てて、当時ラオスに関わっていた邦人宗教家達の活動を浮き彫りにしていきたい。幸い、今年度の調査で、ラオス伝道に携わりその中心的な役割を担った天理教名古屋大教会に、当時の資料（史料）が多数保管されていることを確認することができた（添付資料参照）。次年度ではこれらの資料（史料）を繙くことにより、上に述べたそれぞれの項目「自動車修理工場SILJAの設立」、「サトウキビ栽培」、「巡回医療活動」、「天理教の伝道活動と教育援助」を裏付ける具体的な情報を提示していければと考えている。また、その資料（史料）整理を進めていく中で新たな活動項目が出てくる可能性も秘められているであろう。

さらに、その伝道活動の項目に含まれているサトウキビ栽培や巡回医療活動などは本プロジェクト他班の研究領域ともリンクする可能性があり、より詳細な情報の発信に努めていきたい。

また、担当者自身がラオスで展開した天理教の伝道活動の現場を踏査し、名古屋大教会が保管していた資料（史

料)の裏付けを確認したいと考えている。併せてラオスでは、担当者の本業である博物館標本の収集に携わることももくろんでいる。当面の目標とする収集標本対象および調査対象は、昨秋担当者が執筆した「祖霊像・精霊像の坐り方についての一考察」[吉田 2003]の中で取り上げた「両膝立て坐り」の坐像表現を生み出す背景ともみなされる身体表現を取る時に使われている「背の低い椅子(尻突き椅子)」である。現地での坐り方の実態や坐るモノの変化などの観察から、新たな議論の展開が期待できるかもしれないと考えている。

参考文献

天野博之 2002「第6章 保健と医療」西澤・古川・木内編『ラオスの開発と国際協力』めこん。

山本利雄 1971『メコンの渇きーラオス巡回医療班の記録ー』講談社。

天理大学おやさと研究所編 1997『改訂天理教事典』天理教道友社。

天理大学附属天理参考館編 「事業概要」2003『天理参考館報』No.16。

吉田裕彦 2003「祖霊像・精霊像の坐り方についての一考察」『天理参考館報』No.16

天理大学附属天理参考館

注

¹ 天理参考館は世界の生活文化と考古美術を扱う人文系の博物館である。創設は1930年で、海外に渡り、天理教を広めようとする人々が、諸外国の生活習慣や歴史などの知識を深めることを目的に天理外国語学校(現、天理大学)内に設けられた。創設者は中山正善天理教二代真柱。2001年の秋、現在の建物に移転。

² 革命以前に実施された、タゴン農場開発プロジェクトに呼応しての同地域住民の保健医療に貢献した中小病院運営プロジェクトが、タゴン医療センタープロジェクト(1968年4月～1975年3月)である。ラオスにおける日本の保健医療分野での援助のうち、プロジェクト方式の技術協力として、上記のタゴン医療センタープロジェクト以降では、公衆衛生プロジェクト(1992年10月～1998年9月)、小児感染症対策プロジェクト(1998年10月～2001年9月)などがある[天野 2002:20-21]。

³ 現在は、ラオス語に翻訳された教典と、天理教教会本部で行われる別席を聴講するラオス人を対象としたラオス語の録音テープがラオス人信者のために用意されている。

資料－１：【天理教ラオス伝道活動関係資料】

ファイルのタイトル		内容メモ
「砂糖キビ栽培」菅原日記 1・2	昭和50年(1975年)	*No.1:記録帳 memo Sugawara S.50.1.1 *No.2:記録帳 memo すがわら S.50.9.19
「砂糖キビ栽培」菅原日記 3・4	昭和51・52年 (1976・77年)	*菅原親一 S.51.3.3 *S52～
「砂糖キビ栽培」菅原日記 5・6・7	昭和50年(1975年)	*給与支払帳、農業開発部 *写真 1) SILJA 農場 2) プォントン農場 3) バンマックオ農場 *3月20日撮影
砂糖プロジェクトに関する 提案書	1976年8月?	津留田ファイル 「砂糖プロジェクトに関する提案書」、 Sugar project in Laos, Nissei Sangyo Co.LTD, 砂糖キビ農園での試験栽培等の資料
ラオスに於ける砂糖キビ成 育記録	1977年1月	・「ラオスにおけるさとうきびの成育記録と資 料」日晴産業株式会社 ・Ministere De L'Agriculture des Forets et de L'irrigation による統計資料など
糖業計画(和文)	1976年8月	「砂糖プロジェクト・・提案書」等と内容は同 じ
糖業計画(英文)	同上	
合弁計画書	昭和49年12月 (1976年)	尾張旭市霞ヶ丘町南210 (株)日晴、代表取締役 森井敏晴 黒糖、タピオカ・チップス、シトロネラ香料油 製造などの計画について
海外医療対策委員会記録Ⅰ		1970～75年の5年間ラオス 医療薬品一覧、委員会名簿 こんご医療伝道の資料も含む
海外医療対策委員会記録Ⅱ		昭和47～53年までの議事録
海外医療対策委員会記録Ⅲ		コンゴ憩いの家の閉鎖および移管について
La Mission du Laos 1909(明 治42年)		1881年よりのフランス・カトリック教会による 布教活動の記録(de la Sociee des Etrangeres de Paris

「光は現れた」－東北タイとラオス伝道の歴史－	Claudius BAYET (クワディウス・バイエ) 元タイ・ウボン司教、1981年	訳 津留田正昭 2003年8月
ラオス人民民主共和国視察記録	8月29日～9月17日	ラオス撤退から11年後の再訪 森井、金森など。 現地関係機関との折衝
『天理教海外伝道の一形態－伝道地ラオスとの十年－』	平成14年7月10日(2002年)	森井敏晴著、私家版 論文の一部？
ラオスにおける薬品植物の開発	平成14年3月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・ラオス薬用植物事業（現状に関する事情調査のまとめと、事業計画） ・「医療安全総合研究推進（普及啓発）事業」シンポジウム・プログラム「ミャンマーにおけるケシ代替植物の開発」（H14年2月28日、@虎ノ門、発明会館）：厚生科学研究推進事業「ミャンマーにおけるケシ代替植物の研究班」＜日本薬剤師研修センター理事山本章、同センター佐竹元吉＝NPO MSMP、ナチュラルリスト萩巢樹徳 ・ツルニンジン栽培法 ・The Pharmaceutical Development Centerのちらし ・今井－森井、金森のファックス ・ラオス保健省、The Pharmaceutical Development Center（'96,10,30）の薬品リスト資料 ・語学センターの入学申込書 ・Medicinal Plants in Lao People's Democdratic Republic Survey Reports (No.2) ・中国語の薬用植物事典？コピー ・「ラオス人民民主共和国の薬用調査報告書（第II報）」 ・List of Medicinal Plants of Lao PDR ・「ラオス産民間薬リスト」（入手2001年6月、ビエンチャン） ・「ラオス産民間薬リスト（追加項目）、情報を

		<p>文献と照合</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ラオスの生薬（2001 年今井正治氏購入）」 ・地図「タイ～ラオス～中国（雲南）ルート」 ・名刺類コピー
United Nations International Drug Control Programme	Sept.200～Aug.2004	2001 年～2004 年の 3 年間の国連プログラムの計画書
ラオスの宗教事情調査	平成 13 年 8 月 (2001 年)	<ul style="list-style-type: none"> ・「金森理事ラオス報告」（1993 年 8 月 28 日～9 月 12 日） ・「ラオス事情と日・ラオス関係」（H13 年 4 月、在ラオス日本大使館） ・「ヴィエンチャン案内」（2001 年 5 月、在ラオス日本大使館） ・VT:11236（ラオスで活動する NGO に関する規則）（1999 年 7 月 8 日、副首相兼外務大臣ソムサワット・レンサワット） ・旧「SILJA」株主会議（2001 年 7 月 11 日）など、株式譲渡に関わる関係資料 ・ラオス宗教事情に関する 8 月 2 日～15 日までの聞き取り調査メモ、それをまとめた「ラオス報告」、「拠点設立に関する情報」、建築資材 ・「メコン河」（文・写真：鎌澤久也）『エクセレントワールド』より切り抜き
「ラオスの開発と国際協力」天野博之	・2002 年 2 月	天野博之（ラオス国保健省保健医療協力計画アドバイザー、JICA 専門家）「ラオスの開発と国際協力 第 6 章 保健と医療」
「教育と開発ーラオスの教育開発ー」瀧田修一	・2002 年 7 月 27 日	瀧田修一（ラオス国立大学教育学部所属研究員、国際交流基金派遣フェロー）「教育と開発ーラオスの教育開発」@ラオス研究会でのレジュメ
「ラオス人民民主共和国の動静」	ラオス人民民主共和国の動静ー主として、過去 3 ヶ年の政治、社会経済①2001	<ul style="list-style-type: none"> ①山田紀彦「安定を模索する党指導部」 ②山田紀彦「揺らぐ安定神話」 ③木村哲三郎「強力な引き締め策でインフレ鎮静」

	年、②2000 年、③1999 年	
--	----------------------	--

資料－２：砂糖キビ栽培関係（写真）

「砂糖キビ栽培」菅原日記 6・7 内

農場	撮影日	品種	入手先	入手者、その他
SILJA	S.50.10.31	RK68-156	沖縄	久貝氏
	S.50.10.31	NC310,POJ2726, F146,F148,Q76, H56-7209,RK65-37, RK68-368	沖縄	岡本氏 (NC310 のみ穂 が出る)
	S.50.10.31			9 月 植 え は NC310、 11 月 NC310、RK は全部穂が出る
SILJA 庭シ トロネラ	S.50.10.31		台湾	西岡氏、金森氏
プオントン 農場	S.50.10.30	CO 系、H 系	ノンカイ	SILJA 農業開発部
	S.50.10.30	品種名を SILJA とす る	インドネシア（東京 経由）	岡本氏
	S.50.10.30	そば粉の種	日本より	SILJA 農業開発部
バンホーン 農場	S.50.11.2	CO 系,H 系 計 4602 本 写真は 8 枚	ノンカイ	SILJA 農業開発部
バンマック 農場	S50.10.26	CO 系,H 系 NC0310, RK68-6,RK68-32, RK68-142,RK68- 155BOK（ウドン） 写真 11 枚	バンホーン農場、 SILJA 黍ストック農 場	SILJA 農業開発部
	3 月 20 日 撮影	キビ新植予定地 写真 22 枚		